

大学の日本語教員養成課程の教壇実習を指導した日本語学校指導教師の成長¹

Development of the teachers of the Japanese language school who have instructed the platform training of University's Japanese Language Teacher Training Program.

倉八順子 KURAHACHI, Junko

和洋女子大学・大原日本語学院 Wayo women's university・Ohara Japanese Language School

【キーワード】日本語教員養成課程、教壇実習、教師の成長、多文化共生、まなざしの変容

1. 問題意識

大学の日本語教員養成課程の教育実習が日本語学校で行われるケースが多くなってきている。大学の日本語教員養成課程の教育実習が日本語学校で行われる場合、そこには三者、すなわち、大学の日本語教員養成課程の受講生（実習生）、日本語学校の留学生（日本語学習者）、そして、日本語学校の指導教師がかかわることになる。したがって、大学の日本語教員養成課程の教育実習が実りの多いものになるためには、だれかが犠牲になることなく、この三者にとって共に成長の機会となることが望ましい。

まず、日本語教員養成課程の受講生（実習生）については、近年、「実習を行った学生は、その体験を通じて、学習態度が積極的になったり、行動も積極性が増し、大学院への進学や就職活動にも意欲的になっている」²ことが報告されている³。筆者が行った調査においても、教壇実習により多文化共生につながる“やわらかなまなざし”と“対話力”が育まれていることが見出されている（倉八 2013a）。

一方、実習を受け入れる日本語学校の指導教師については、「これまで何度もたびたび指摘されてきたことだが、教育実習は、どちらかといえば受け入れ側に負担がかかるものである。しかし、日本語教育界への貢献であると考えれば、他の業務となんとか折り合いをつけて、実習生の指導にあたるべきだと考えている」（宮本 2012）のように、指導教師に負担がかかるという視点からの指摘が見られる。留学生への日本語授業で手一杯の教師にとって、養成課程の教壇実習指導は“負担がかかる”ことは確かであろう。

受け入れ当初は、見学される教師は、見学されることに慣れておらず、緊張感が高まることは容易に想像されるし、教壇実習指導にかかわる教師は、大学生の指導経験も少ないであろうから、指導技術も未熟で、ストレスが高まることは容易に想像される。しかし、見学される教師および指導にあたる教師は、日本語教師のなかでも経験が豊かで実績がある教師が選ばれるであろうから、見学および指導の経験を積むことによって、見学の経験および指導の経験から学ぶことができるようになり、教師としての成長につながるはずである。この推測が事実であれば、大学の日本語教員養成課程の教壇実習が日本語学校で実施されることは、実習生、留学生にとってのみならず、日本語学校の日本語教師にとっても成長の機会となると言える。

筆者は、和洋女子大学日本語教員養成課程を担当して7年目になるが、2010年度から和洋女子大学日本語教員養成課程の演習課目『日本語教育実習』の教壇実習を大原日本語学院で行ってきている⁴。この3年間に35人の実習生が、大原日本語学院の5人の指導教師のもとで教壇実習指導を受けてきた。筆者は、大原日本語学院の講師でもあり、教壇実習を指導した指導教師は、筆者の同僚でもある。筆者は、大学の日本語教員養成課程の教壇実習指導を行うことが、日本語学校の指導教師にも人間的成長をもたらすことを、同僚教師として感じとってきた。

本稿では、3年間の教壇実習指導を経験した指導教師に3年間の経験を振り返ってもらう目的でインタビュー調査を行った結果を、教壇実習指導教師（以

下指導教師)の成長という視点から報告することを目的としている。

以下では、2で大学の日本語教員養成課程の実情、3で和洋女子大学の日本語教員養成課程の実情を報告する。4で5人の指導教師へのインタビュー調査の結果から、指導教師の成長を読み解き、最後に5で全体的考察を行う。

2. 大学の日本語教員養成課程の実情

文化庁の統計によると、国内の日本語教師養成の現状は表1～表3のとおりである。日本語教員養成を行っている大学は、2011年現在199校、受講者は19,312人である。これを平均すると1大学97人となり、この人数から、学部横断的な資格課程としての日本語教員養成課程より、日本語教育専攻の大学の日本語教育養成課程が多いと想像される。

大学の日本語教員養成課程では日本語教育実習が必須科目であるが、どのような形態で教育実習が行

われているかについては、筆者の調べた限りでは、全体を包括できるような報告は見られない。日本語教育専攻の大学の教育実習については、いくつか報告がされている。例えば、東京女子大学では4つの日本語学校で実習が行われていること、及び、学内のプログラムに留学生の参加を募り実習が行われていることが報告されている⁵。また、国士館大学21世紀アジア学部日本語教員養成課程では、海外で日本語教育インターンシップが行われていることが報告されている⁶。このような報告から、日本語専攻の日本語教員養成課程では、国内外の日本語学校で教育実習を行う大学が増えていることが想像される。

3. 和洋女子大学の日本語教員養成課程

1) 日本語教育実習の実態

筆者がかかわる和洋女子大学日本語教員養成課程は、学部横断的な資格課程として設定されている。

筆者は、和洋女子大学日本語教員養成課程で、非

表1 日本語教師養成・研修実施機関・施設等数の推移

	2001年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
大学	144	215	223	192	197	199
短期大学	18	10	13	13	10	8
一般の施設・団体	211	316	285	295	345	318
合計	373	541	521	500	552	525

表2 日本語教師養成・研修担当の教師数の推移

(単位：人)

	2001年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
大学	2,000	3,116	3,503	2,126	3,248	2,967
短期大学	90	33	57	50	41	37
一般の施設・団体	2,028	2,023	1,950	1,962	2,236	1,749
合計	4,118	5,172	5,510	4,138	5,525	4,753

表3 日本語教師養成受講者数の推移

(単位：人)

	2001年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
大学	20,623	23,124	28,613	22,536	17,680	19,312
短期大学	301	367	743	377	549	243
一般の施設・団体	15,935	14,709	11,230	10,695	10,977	9,427
合計	36,859	38,200	40,586	33,608	29,206	28,982

表1～表3は平成23年度国内の日本語教育の概要（文化庁文化語課）による

常勤講師として、7年前から日本語教育関連科目6単位（日本語教授法・日本語教育教材・日本語教育実習）を担当している。担当した当初は、日本語教育実習を、学生同志が生徒役を行う模擬授業という形態で行っていた。しかし学生から「実際に日本語学校を見学したい」「日本語学校で実習したい」という要望が強く、関係者の理解・協力を得て、2010年から筆者が勤めるようになった日本語学校（大原日本語学院）で教壇実習ができる体制が整った⁷⁾。

大原日本語学院での教壇実習は、大原日本語学院の初級コース（10週間）の終わりに設定され、3日間ではあるが3週間をかけて行われる。教壇実習の内容は試験前の復習という位置づけであり、内容は①「辞書形」の復習とコミュニケーション活動、②「て形」の復習とコミュニケーション活動、③「ない形」の復習とコミュニケーション活動である。図1に教壇実習の流れを示す。

以下では大原での教壇実習について図1の流れにそって簡単に説明する。

見学実習は実習生全員で同じ曜日に行い、教壇実習は1人ずつ別の曜日で行う。

(1) 見学実習まで

見学実習を行う5日前までに、実習生は、教壇実習の教案を指導教師にメールで送付する。指導教師は、教壇実習の教案のチェックを行う。

(2) 見学実習 1 回目

① 見学（9：00～12：10）

実習生は教壇実習を行うクラスに入り、担任教師が行うその日の授業をすべて見学する（9：00～12：10）。このとき、授業中に簡単な自己紹介を行う時間をとり、実習生が積極的に参与観察できる環境を作る。実習生は、教壇実習を行う学習者について積極的に観察を行う。1回目の見学実習の目的は、1. 教師がどのように学生にかかわっているか、2. 学習者はどのように学びにかかわっているか、3. 教師と学生とのインターアクション、について学ぶとともに、4. 学習者についての情報を得ること（名前、国籍、年齢、来日目的、趣味、日本語習得の特徴など）、5. 自分の設計した教壇実習の内容をどのように改善したらよいか、について考えることである。

② 昼休み

昼休みは留学生と同じ場所（学生ホール）ですごし、留学生に積極的にかかわる時間とする。

③ 教案指導（1：30～3：00）

午後は、指導教師から教案指導を受ける。教案をどのように改善したらよりよくなるかの方向性についてのアドバイスを受ける。指導は、あくまでも実習生自身が工夫できるように方向性を示すという方針で行う。実習生は教壇実習当日に使用する教材を持参し、それについても指導教師からのアドバイス

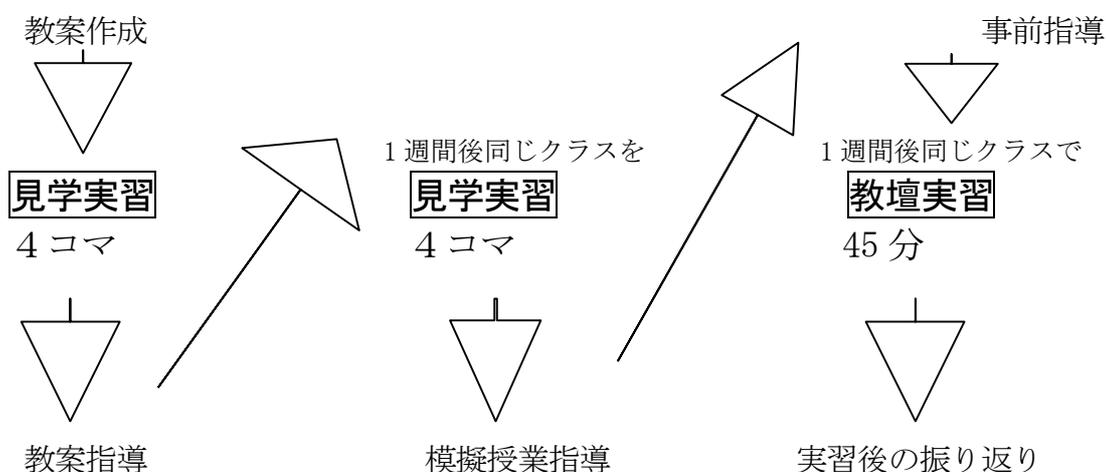


図1 教育実習の流れ

を受ける。アドバイスに基づいて修正した教案を3日後までにメールで送る。

(3) 見学実習 2 回目

① 見学 (9:00~12:10)

1 週間の間に授業がどのくらい進んだのかを体験するとともに 2 回目の見学の時間には、担任教師は、おおよそ 15 分程度、留学生と実際に会話する時間を設ける。教壇実習にむけて、実習生と留学生の信頼関係を築くのが目的である。実習生と留学生は年齢が近く、また目標に向かって学んでいるという意味で志を同じくする仲間であるので、打ち解けて会話がはずむ場合が多い。

② 昼休み

実習生は 1 週間前と同様、学生ホールで留学生とともに時間をすごすが、前回よりも積極的に留学生にかかわる姿勢がみられる。

③ 教壇実習事前指導 (1:30~3:00)

指導教師の前で教壇実習の模擬授業を行い、1. 教材の提示の仕方、2. 指示の仕方、3. 非言語コミュニケーション、4. メリハリの付け方、5. 区切りの付け方、などについて実践的な指導を受ける。

(4) 教壇実習

① 教壇実習事前練習 (11:00~12:00)

教壇実習当日、教壇実習を行う教室で、事前練習を行う。実習生の過度の緊張感をほぐし、よい状態で教壇実習を出来るように、指導教師は“やわらかなまなざし”で指導を行う。

② 教壇実習 (12:20~13:05)

12:10 に授業を終えた留学生が教壇実習が行われる教室に移動する。実習生は 45 分間の教壇実習を行う。

③ 教壇実習事後指導 (13:30~15:00)

指導教師は評価表⁸に基づいて事後指導を行う。

(5) 振り返りのレポートの提出

実習生は 1 週間後までに、振り返りのレポート (2000 字) を提出する。レポートの内容は 1. 見学実習を通して学んだこと、2. 教壇実習を通して学んだこと、3. 教壇実習を経験して今後の具体的な目標、

である。

2) 実習生と指導教師の実態

2013 年度は、大原日本語学院で教壇実習を行うようになって 4 年目になる。2010 年から 2012 年の 3 年間に 35 名の受講生の教壇実習を行った。大原日本語学院は、年 4 回初級クラスが開講される。4 月 (春学期)、7 月 (夏学期)、10 月 (秋学期)、1 月 (冬学期) である。このうち、大学生の日本語教壇実習が物理的に可能なのは、4 月 (春学期)、7 月 (夏学期)、10 月 (秋学期) である。

この 3 年間に実習生の指導にかかわった指導教師は、大原日本語学院の専任教員 5 名である。表 4 に和洋女子大学日本語教員養成課程の受講生の人数、表 5 に 2010 年度からの教壇実習生の人数、表 6 に教壇実習指導教師別実習生の人数を示す。

4. 実習を指導した指導教師の意識の変容についての調査

1) 質問紙の作成

指導教師がこの 3 年の経験を経てどのように変容したかを調査するために、自己決定理論による動機づけのプロセス (Reeve, 2009) に基づいて質問紙を作成した。

図 2 に示すとおり、自己決定理論では、人間の意識が変容し成長がもたらされるのは人間のもつ欲求が充足されるからと捉え、1. 自律性の欲求が充足されたとき、2. コンピテンスの欲求が充足されたとき、3. 関係性への欲求が充足されたとき、4. 自己実現への欲求が充足されたときに、エンゲージメント (かかわり) の程度が深まり、成長がもたらされるとする。

この自己決定理論に基づいて、2 種類それぞれ 10 項目からなる質問紙を作成した。1 つは、指導教師に対する質問紙であり、「学生指導についての意識の変容」についての質問紙、もう 1 つは、見学授業を行う教師に対する質問紙であり、「見学されることについての意識の変容」についての質問紙である。

表4 和洋女子大学日本語教員養成課程の受講生の人数

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	合計
日本語教授法	31	47	16	18	12	22	15	7	8	176
日本語教育教材	30	37	13	17	19	21	15	7	8	167
日本語教育実習	27	28	36 前期22 後期14	13	14	17	10	9	5	159

表5 大原日本語学院の教壇実習生の人数

	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
春学期		4名	3名	3名
夏学期	6名	2名	3名	
秋学期	9名	4名	3名	2名
計	15名	10名	9名	5名

表6 教壇実習指導教師別実習生の人数

	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度*	計
教師1	春学期 夏学期 3名 秋学期 4名	春学期 2名 夏学期 1名 秋学期 2名	春学期 1名 夏学期 1名 秋学期 1名	春学期 1名	17名
教師2	春学期 夏学期 1名 秋学期 2名		春学期 夏学期 秋学期 1名	春学期 1名	5名
教師3	春学期 夏学期 1名 秋学期 2名		春学期 2名 夏学期 1名	春学期 1名	6名
教師4	春学期 夏学期 秋学期	春学期 1名 夏学期 1名 秋学期 2名	春学期 夏学期 秋学期 1名		5名
教師5	春学期 夏学期 1名 秋学期 1名	春学期 1名	春学期 夏学期 1名		4名
合計	15名	10名	9名	3名	37名

*2013年度は秋学期を含め、5名の予定。

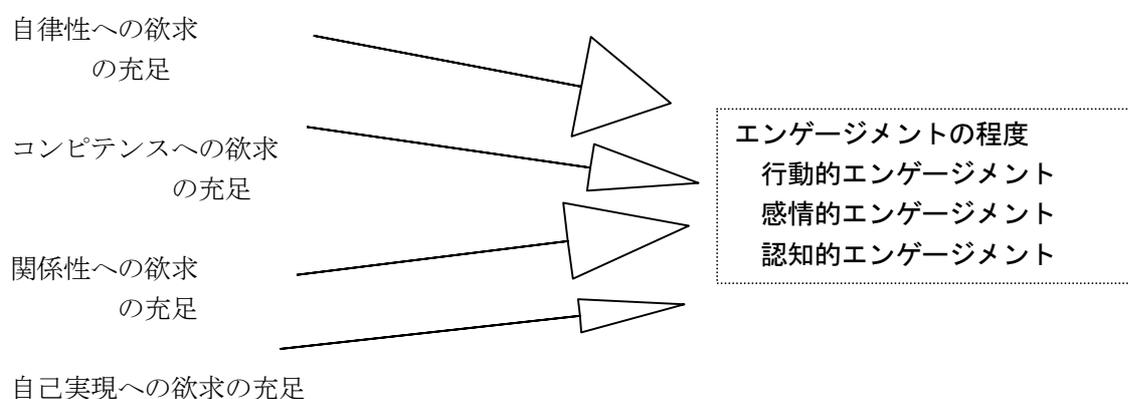


図2 動機づけのプロセス 自己決定理論による (Reeve2009 より作成)

学生指導についての意識の変容についての質問紙は、自律性の充足の変容2項目(1. 日本語教師としての自分の出発点を振り返るよい機会と感ずるようになった、2. 実習生へのまなざしに変容した)、コンピテンスの充足の変容2項目(3. 自分の授業を振り返るよい機会と感ずるようになった、4. 自分の経験を伝えていける喜びを感ずるようになった)、関係性の充足の変容4項目(5. 教育的かかわりあいができるよい機会と感ずるようになった、6. 共通の目標に向けて相実行動できる良い機会と感ずるようになった、7. 大学生に接することのできる良い機会と感ずるようになった、8. 他の世代の考えを知るよい機会と感ずるようになった)、自己実現の充足の変容2項目(9. 社会的貢献のよい機会と感ずるようになった、10. 達成感を感ずられるようになった)である。

見学されることに対する意識の変容についての質問紙は、自律性の充足の変容2項目(1. 見学の意味を理解できるようになった、2. 実習生へのまなざしに変容した)、コンピテンスの充足の変容4項目(3. 緊張感がほどよくなった、4. 見学から自らも学べるようになった、5. 負担感が少なくなった、6. 準備を楽しめるようになった)、関係性の充足の変容2項目(7. 実習生がいて活動範囲が広がると感ずられるようになった、8. 同世代の留学生と実習生の交流に喜びを感ずられるようになった)、自己実現の充足の

変容2項目(9. 見学されて達成感を感ずられるようになった、10. 自分にとっての意味が感ずられるようになった)である。

2) 調査の方法

調査は、2013年度春学期の教壇実習が終わったところで行った(2013年6月17日～26日)。校長および指導教師(教師1～教師5)に和洋女子大学日本語教員養成課程についての説明、及び今回の調査の目的について説明を行った後、教師1～教師5に個別に1時間程度の時間をとり、筆者がそれぞれの項目を読み上げ、本人に数字に○をつけてもらうと同時に、感ずていることを語ってもらうというインタビュー調査の方法で聞き取り調査を行った。教師によって言語化の程度に差があったが、聞き取り調査は教師1～教師5にとっても、振り返りのよい機会となったようであった。

3) 教師1～教師5のプロフィール

表6に示したように、教師1は17名、教師2は5名、教師3は6名、教師4は5名、教師5は4名の実習指導を行った。また、表7に示すように、教師3は2回、教師4は2回、教師5は3回の見学実習をされる体験をした。

表8に教師1～5のプロフィールを示す。教師1～教師4は日本語教師の経験が10年以上である。また教師1～教師3は、和洋女子大学日本語教員養

表7 教壇実習指導教師別見学クラス

	2011年度	2012年度	2013年度	計
教師3		春学期1 秋学期1		2回
教師4	春学期1 夏学期1			2回
教師5	春学期1	夏学期1	春学期1	3回

2010年度は別の教師が担当

表8 指導教師のプロフィール

	日本語教師経験年数	日本語教員養成にかかわる経験
教師1	10年3ヶ月	主任教員。和洋女子大学との教壇実習コースの立ち上げに最初から関わる。
教師2	14年	他校で教師養成を担当。
教師3	15年3ヶ月	副主任教員。大原日本語学院の日本語教師養成講座を担当。
教師4	12年	和洋女子大学の教壇実習がはじめての体験
教師5	5年	和洋女子大学の教壇実習がはじめての体験

表9 指導教師別学生指導についての意識の変容についての調査結果

	教師1	教師2	教師3	教師4	教師5	平均	平均
1. 日本語教師としての自分の出発点を振り返るよい機会と感ずるようになった (自律性の充足)	4	4	3	4		3.8	3.9
2. 実習生へのまなざしに変容した (自律性の充足)	4	4	4	4	4	4	
3. 自分の授業を振り返るよい機会と感ずるようになった (コンピテンスの充足)	4	4	4	4		4	3.1
4. 自分の経験を伝えていける喜びを感ずるようになった (コンピテンスの充足)	4	4	3	3		3.5	
5. 教育的かかわりあいができるよい機会と感ずるようになった (関係性の充足)	3	4	3	4		3.5	3.7
6. 共通の目標に向けて相互行動できるよい機会と感ずるようになった (関係性の充足)	4	3	4	4		3.8	
7. 大学生に接することのできる良い機会と感ずるようになった (関係性の充足)	4	4	3	4		3.8	
8. 他の世代の考えを知るよい機会と感ずるようになった (関係性の充足)	4	3	4	4		3.8	
9. 社会的貢献のよい機会と感ずるようになった (自己実現の充足)	2	3	3	4		3.0	3.0
10. 達成感を感じられるようになった (自己実現の充足)	人による	3	3	3		3.0	

*数字は4件法(4:そう思う、3:どちらかといえば思う、2:どちらかといえば思わない、1:思わない)

*注目すべき結果を太字で示した

成課程の指導以外にも教員養成の指導の経験をもつ。教師5は年齢が最も若く、日本語教師の経験も他の教師に比して短い。

4) 質問紙調査の結果

(1) 学生指導についての意識の変容について

表9に学生指導についての意識の変容についての教師1～5の調査の結果と平均値を示す。また表10にそれぞれの項目についての聴き取り調査の結果を示す。教師5は、「養成課程の実習指導は『本当に自分が担当するのでよいのか』という疑問をもちながらやっている状態であり、これらの質問にはとてもポジティブに答えられる状態ではない」と、明るく、

率直に、語ったので、答えられるところにだけ数字で答えてもらい、その他は聴き取り調査を行った。その中で、実習生へのまなざしについては、「まなざしは確かにかわったと言える」と明確に語ったのが印象的であった。

調査結果を、動機づけの項目にそってみる。まず、自律性の充足の変容は2項目4人の平均値3.9で、そのうち、「2. 実習生へのまなざしに変容した」は全員が4(そう思う)であったことは注目に値する。実習生についての理解が深まるに伴って、「実習生もがんばっている」「実習生によりそって指導しよう」という実習生への“やわらかなまなざし”

表 10 各項目についての聴き取り調査の結果

<p>1. 日本語教師としての自分の出発点を振り返るよい機会と感じるようになった (自律性の充足) *自分がまだまだ勉強しなければならないと感じる。</p>
<p>2. 実習生へのまなざしに変容した (自律性の充足) *最初は学生の立ち位置に対する理解がたりなかった。彼女たちの立ち位置がわかってきた。 *口頭での言語化がまだ十分でない実習生のレポートを読んで、実習生の考えや苦勞、工夫がわかり、彼女たちもがんばっていることに気づいた。</p>
<p>3. 自分の授業を振り返るよい機会と感じるようになった (コンピテンスの充足) *重要な仕事という認識 *責任を感じる *実習生が工夫すればするほど、自分はどのようにしているのかと自分の授業を振り返るようになる。</p>
<p>4. 自分の経験を伝えていける喜びを感じるようになった (コンピテンスの充足) *経験に自信がないので自問自答している。 *自分の経験を役立てることができて嬉しい。</p>
<p>5. 教育的かかわりあいができるよい機会と感じるようになった (関係性の充足) *日本語学校は外国人を相手にする特殊な世界。日本人に対して指導することで気づくことがある。</p>
<p>6. 共通の目標に向けて相互行動できるよい機会と感じるようになった (関係性の充足) *楽しみを共有できる。態度ではわからないことがあるが、必ず工夫してくることが嬉しい。 *教壇実習が成功したときは本当にうれしい。</p>
<p>7. 大学生に接することのできる良い機会と感じるようになった (関係性の充足) *世代が離れた大学生とコミュニケーションできる。指導の間に感じているより、多くのことを学んでいることが振り返りのレポートからわかる。 *ふだんの生活では全く大学生に接することがないので貴重な機会である。</p>
<p>8. 他の世代の考えを知るよい機会と感じるようになった (関係性の充足) *同じ年代でも、留学生と日本の学生とで考えが違うことがわかって楽しい。</p>
<p>9. 社会的貢献のよい機会と感じるようになった (自己実現の充足) *開かれた世界に進もうとしている学生が増えていることがうれしい。 *社会的貢献とまでは感じない。</p>
<p>10. 達成感を感じられるようになった (自己実現の充足) *満足できていない。 *実習指導した学生によって違うので一概には言えない。</p>

が芽生えていることが伺える。

次に、コンピテンスの充足の変容は2項目、4人の平均値は3.1であった。「3. 自分の授業を振り返るよい機会と感じるようになった」は、全員が4(そう思う)と答えた点が注目に値する。実習指導に責

任をもって取り組むことによって、実習生の授業行動を自らの授業行動と比較し内面化し、自己のコンピテンスにつなげていったことが伺われる。

関係性の充足の変容は、4項目4人の平均は3.7であった。全員が4と答えた項目はないが、5人の

教師は、おおむね、「大学生に接することができる良い機会」ととらえて実習指導にあたっていることが見出された。

最後に自己実現の充足の変容は、2項目4人の平均値は3.0であった。大学教員の使命は、教育・研究・社会的貢献の3つであり、日本語教育養成課程で日本語学校に引率し実習指導を行うことを、ある意味で、社会的貢献ととらえて行っている。日本語学校の教師にとって、教壇実習指導を社会的貢献と捉えるのは「そこまではいけない」と語った教師が多かった。自己実現の充足の変容を測定するには、質問項目の設定に工夫が必要であることがわかった。

(2) 見学されることについての意識の変容について

表 11 に見学されることに対する意識の変容についての教師3～5の調査の結果と平均値を示す。

この中で注目し値するのは次の3点である。まず、「2. 実習生へのまなざしに変容した」に教師5も含めて全員が4と答えたことである。教師5は「日本語教師になりたいとは思わないという実習生もいて、自分は教師に必ずなりたいたいと思って教職をとったので、どうしてもそんないい加減な気持ちなのだろうと思ったりしたが、興味があるから受講するのだということに気が付いた」と語ったことが印象的であった。

表 11 指導教師別見学されることに対する意識の変容についての調査結果

	教師 3	教師 4	教師 5	平均
1. 見学の意味を理解できるようになった (自律性の充足)	3	4		
2. 実習生へのまなざしに変容した (自律性の充足)	4	4	4	4
3. 緊張感がほどよくなった (コンピテンスの充足)	3	3		3
4. 見学から自らも学べるようになった (コンピテンスの充足)	4	4		4
5. 負担感がすくなくなった (コンピテンスの充足)	3	3	1	
6. 準備を楽しめるようになった (コンピテンスの充足)	3	3	1	
7. 実習生がいて活動範囲が広がると感じられるようになった (関係性の充足)	4 特に強く感じる	4	4	4
8. 同世代の留学生と実習生との交流に喜びを感じられるようになった (関係性の充足)	4 特に強く感じる	4	4	4
9. 見学されて達成感を感じるようになった (自己実現の充足)	2	3	1	
10. 自分にとっての意味が感じられるようになった (自己実現の充足)	4	4		4

*数字は4件法(4:そう思う、3:どちらかといえば思う、2:どちらかといえば思わない、1:思わない)

*注目すべき結果を太字で示した

聴き取り調査

*見学は責任のあること。自分の好みを押しつけてはいけない。

*留学生にとってはいい方向に働く

*見学の間には留学生の名前をしっかりと覚える実習生の姿勢に学ぶところがあった。

次に、「4. 見学から自らも学べるようになった」について、教師 3、教師 4 が 4 と答えていることである。教師 3 は、「見学の中に留学生の名前をしっかりと覚える実習生の姿勢に学ぶところがあった」と答えている。見学される教師は、実習生と空間を共有し、実習生の見学に臨む姿勢を目の当たりにすることで、気づきを与えられ、見学されることをポジティブにとらえることが出来るようになる可能性が見出された。

最後に、これが最も注目すべき点だが、「7. 実習生がいて活動範囲が広がると感じられるようになった」、「8. 同世代の留学生と実習生との交流に喜びを感じられるようになった」に教師 5 を含め全員が、「4 : そう思う」と答えたことである。「授業を見学されることは留学生にとってはいい方向に働く」というのが全員の一致した認識であった。これは 3 つの点から解釈されよう。ひとつはホーソン効果⁹であり、もうひとつは文化的背景の異なる同年代の若者が目標に向って学んでいる姿に接することで、留学生の意欲が高まったこと、3 つ目は、実際にコミュニケーション活動が行われ、留学生にとって自らの日本語力をブラッシュアップする機会になったからと解釈される。

5) 自由記述質問の結果

(1) 実習を終えた大学生に望むこと

表 12 に「実習を終えた大学生に望むことは何ですか」という質問への回答結果を示す。

教師 1～教師 5 に共通して言えることは、社会人となったときに教壇実習の経験を活かしてほしいと考えていることである。言い換えれば、実習指導にあたる教師は、自分の経験から、社会に出たら必要と考えている力をつけようという姿勢で、この教壇実習に臨んでいることが伺える。

(2) 教壇実習がさらに教壇実習指導教員の学びや喜びにつながるために必要な点

表 13 に「教壇実習がさらにあなたにとって学びや喜びにつながるためには、どのような改善が必要だと思いますか」という質問への回答結果を示す。教師 1～教師 5 に共通して言えることは、実習生の実態についてもっと知りたいということであった。卒業後どのように変容していったかについても知りたいと考えている教師がいることは、印象的であった。日本語教員養成課程は 2 年のコースであり、日本語学校で行われる教壇実習はわずか 3 週間という期間ではあるが、指導教師にとってはこの 3 週間は責任ある大きな経験であり、深くかかわろうとしている指導教師の姿勢が浮き彫りにされた。筆者はこのコースを担当するものとして、日本語学校の指導教師のこの姿勢に、感謝するとともに、一層の責任を自覚した次第である。

表 12 「質問 1 実習を終えた大学生に望むことはなんですか」についての調査結果

教師 1	Plan-do-see の重要性、この世代にこれに取り組むことの貴重さ、を改めて認識してほしい。失敗しても振り返れば成功につながるということに気づいてほしい。
教師 2	この機会を自分を振り返るひとつのきっかけとしてほしいと願います。
教師 3	社会へ出てから必要とされる能力（コミュニケーション力や自律的に考える力など）を実習をとおして学ぶことができたと思います。また 45 分の授業を組み立て運営したという達成感も感じたと思いますので、それを自信につなげてほしいです。
教師 4	開かれる、成功体験を実習指導のキーワードにしている。外国人に触れる、工夫を重ねて創り上げる、がんばってよかったと思える体験は人生にプラスに働く。この体験はどんな分野でも活かせると思う。その後の仕事に活かしてほしい。
教師 5	何らかの形で多国籍の人、いつも会う機会がない人に興味をもってもらえるようになったらいい。視野が広がったらいい。 教師になる気がないのになんとなく履修する学生がいることには最初とまどいがあったが、興味あることをやってみようということだと気がついた。

表 13 「質問2 教壇実習指導がさらあなたにとって学びや喜びにつながるためには、どのような改善が必要だと思いますか」についての調査結果

教師 1	現状の日本語教員養成課程として設定されている講義科目は本当に日本語教員養成の観点から有機的なつながりを形成しているのか、そうでなければそれについての改善、工夫をぜひお願いしたい。
教師 2	* 大学での学びの内容と実習でのつながりを知ること。 * 卒業後の様子や変化等について知ること。
教師 3	初年度は教案指導や実習の指導においてどのレベルに照準を合わせたらいいか分からず、また、日本人の大学生との接し方に慣れていないため、初めのうちはとまどいがあった。今年度はだいぶなれて指導がしやすくなった。
教師 4	学生のことを知りたい。開かれた世界に進もうとしている学生が増えていることがとても嬉しい。
教師 5	精神的に負担である。自分の経験が指導に伴っていないと感じてしまう。私でいいのかという思いがある。自分はこう考えるが、他の教師だったらどうだろうと考える。

5. 全体的考察

本稿では、大学の日本語教員養成課程の教壇実習が日本語学校で行われた場合、教壇実習指導にあたる日本語学校の指導教師が教壇実習の経験を積むことによってどのような成長がもたらされるかを調査する目的で、3年間の教壇実習指導を経験した5人の指導教師に、質問紙による聴き取り調査を行った結果を分析し、報告を行った。

筆者の問題意識の背景には、同僚として、日本語学校の教壇実習の指導教師と接してきた3年間に、指導教師のひたむきな指導の姿勢を目の当たりにし、直観として、実習生への“まなざしに変容”してきていると感じられたこと、また、指導に喜びを感じてきていると感じられたこと、があった。

5人の指導教師に行った質問紙調査の結果、実習生へのまなざしの変容については、全員が「まなざしに変容したことは確かだ」と語ったことは嬉しい発見であった。

また、実習指導を自己のコンピテンスの充足として捉えられるかどうかは、日本語教師としての経験年数によることを見出されたことは、教壇実習の指導教師をどう選定するかについて注意が必要であることを示唆している。一人の教師は、「ポジティブな気持ちでは取り組めない。自分でいいのかという疑問がある。このような質問紙に答えること自体がむずかしい」と、率直に、心情を吐露した。

10年以上の指導経験をもち、かつ、日本語教員養成にかかわってきた、あるいは、現在かかわっている教師については、自律性の充足、コンピテンスの充足、関係性の充足、自己実現の充足に変容がみられた。これら熟達した4人の教師は、教壇実習指導に積極的にエンゲージメントし、多文化社会に必要な“やわらかなまなざし”を身につけていっていることが伺えた。

また、見学されることについては、見学された3人の教師がともに「実習生へのまなざしに変容した」「実習生がいて留学生にとってプラスの効果が出ている」と感じていることが明らかにされた。このことは、見学実習が実習生にとっても留学生にとっても、さらに見学される教師にとってもプラスに機能することを示唆している。

今後へのぞむこととして、実習生の実態についてさらに知りたいと述べた指導教師が多かったことは、さらなるエンゲージメントをもってかかわりたいという教壇実習指導教師の積極的な姿勢を示すものとして捉えることができる。

大学の資格課程の日本語教員養成課程は、即戦力としての日本語教師を育成する目的をもつ日本語専攻の教員養成、あるいは、民間の日本語教師養成機関が行う日本語教師養成とは異なり、多文化共生社会を生きるために必要な力（“やわらかなまなざし”と“対話力”）を身につけるプロセスと位置づけるこ

とができよう。そこにかかわる日本語学校の指導教師が、このプロセスに寄り添うことをとおして、多文化社会に必要な“やわらかなまなざし”を身につける可能性が示されたことは意義が深い。

本稿では、日本語学校での教壇実習が、教壇実習にかかわる指導教師にとって積極的な学びの機会となるという視点から探索的調査を行ったが、今後もこのような視点からの研究がなされ、日本語学校での教壇実習の認識が、日本語学校にとって「負担のかかるもの」から「学ぶ機会となる」と変容していくことが望まれる。

注

- 1 調査にご協力いただいた大原日本語学院教務主任鈴木健司先生はじめ教壇実習を指導していただき、忙しいなか、調査に協力していただいた5人の指導教師の先生にこころからの謝意を表します。
- 2 柴田徳文「海外日本語教育インターンシップ・国際日本語教育実習—日本語教育と異文化理解シンポジウムによせて」『海外日本語教育インターンシップ・国際日本語教育実習—報告書2012—』(国士舘大学21世紀アジア学部日本語教員養成過程編) p.3
- 3 例えば、2012年度日本語教育実習報告書(東京女子大学日本語教員養成課程)参照。
- 4 和洋女子大学日本語教員養成課程の教育実習が大原日本語学院で行われるようになった過程については倉八(2012)参照。
- 5 2012年度日本語教育実習報告書(東京女子大学日本語教員養成課程)参照。
- 6 『海外日本語教育インターンシップ・国際日本語教育実習—報告書2012—』(国士舘大学21世紀アジア学部日本語教員養成過程編)参照。
- 7 このプロセスについては倉八(2012)参照
- 8 評価表の項目は、1. 授業の構造について) 準備は適切か、2) 授業の時間を守ったか、3)

目標の提示は明確か、4) 導入は明確か、5) 活動をよく導いていたか、6) 学生の間違いの指摘を適切にしていたか、7) 教師と学生の話すバランスは適切か、8) クラス全体に働きかけていたか、9) まとめは適切か、2. 教授態度について1) 話し方は明確か、2) 熱意が感じられたか、3) 言語コミュニケーションとともに非言語コミュニケーションも用いていたか、の12項目。12項目について5件法で評価するとともに、各項目にコメントを書く。最後に実習生へのメッセージを記述する。

- 9 ホーソン効果とはシカゴ近郊のホーソン工場の照明実験で見出された効果で、期待されると感じることで遂行行動を高めるといわれる。見学されるという環境にいる学習者はこのクラスは期待されていると感じることから、意欲が増し、遂行行動が高まると考えられる。

参考文献

- 春原憲一郎・横溝紳一郎編著(2006)『日本語教師の成長と自己研修』凡人社
- 国士舘大学21世紀アジア学部日本語教員養成課程編『海外日本語教員インターンシップ・国際日本語教育実習—報告書2012—』
- 倉八順子(2012)「和洋女子大学日本語教員養成課程についての考察—養成課程七年間の歩みと今後の課題」『和洋國文研究』第47号 pp.65-77
- 倉八順子(2013a)「日本語教員養成課程についての考察2—育まれる対話にひらかれる姿勢—」『和洋國文研究』第48号 pp.55-66
- 倉八順子(2013b)「多文化共生につながる“やわらかなまなざし”と“対話力”」『教育心理学 教育の科学的解明をめざして』安藤寿康:鹿毛雅治編 pp.77-80 慶應義塾大学出版会
- 宮本真由美(2012)「日本語教育実習生の受け入れと課題」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』6 pp.21-25
- 東京女子大学日本語教員養成課程『2012年度 日本

語教育実習報告書』

Reeve, J (2009) *Understanding motivation and emotion* (5th ed) Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.